

一 民主諸政党の特質と現勢

(1) 成立経過からみた特長

中華人民共和国は、その成立いらい一党制を採用せず、民主諸党派が、中共を助けながら、民主統一戦線の構成単位として活動している。これらの政党は、新中国成立当初には、中共以外に一〇を数えたが、そのご四九年十二月に人民救国会が解消し、また同年十一月に三民主義同志連合会と国民党民主促進会が国民党革命委員会に合流したので、現在の中国の政党は、中共がいにつぎの七政党をかぞえている。

中国国民党革命委員会、中国民主同盟、中国民主建国会、中国民主促進会、中国農工民主党、中国致公党、九三学社。

このほかに、民主統一戦線の政治単位の一つとして、台湾民主自治同盟があるが、これはもっぱら台湾問題の解決をめざしている台湾省出身者の政治同盟であるから、他の政党と区別して考える必要がある。また同じく民主統一戦線の政治単位として、中国では郭沫若、馬寅初らの人々を無党無派として一政治単位としてあつかい、また中国新民主主義青年団を一つの政治単位として認めたきた。しかし、前者はその名の示すように特定の組織を意味していな

いし、後者は政治団体ではあるが青年の組織であり、その性格は中共の助手であり予備軍であるとされている。

この七つの民主政党の大部分は、抗日戦争の時期に小さなグループとして形成され、戦後の試練をへて、国民党独裁に反対して中共とともに歩むことになり、新中国になってから本格的な発展の道を辿りはじめた、ということができる。そのなかで比較的古い歴史をもっているのは農工民主党であって、その前身は一九三〇年九月に結党された「第三党」とよばれるものである。しかし、この党もその蔣介石独裁のもとでほとんど活動できずにいたが、戦後に国共内戦のはじまった四七年二月に、農工民主党と改名して、政治活動をはじめた。致公党はさらに古い歴史を持ち、アメリカや南洋の華僑を中心に一九二六年に創立されたが、抗日戦時期に華僑のあいだの愛国運動を組織し、一九四七年香港で第三回大会をひらいて、中共の提唱する統一戦線に参加することをきめた。民主政党のうちで、実質的な意味で、もつとも歴史をもっているのは中国民主同盟である。抗日戦争中の一九四一年に、当時重慶や香港で国民党の一大独裁に反対していた各グループがあつまって民主政団同盟が結成され、機関紙として「光明日報」を香港で発行したが、一九四四年に「政団」という字をとって中国民主同盟として発足した。この政党がもつとも華々しい役割を演じたのは終戦後の国共対立にさいして一種の中間勢力としてアメリカ側の支持をえたときであって、内戦を回避して民主的な連合政府を樹立するために一九四六年一月に重慶でひらかれた政治協商会議には、国民党の代表八名、中共の代表六名とならんで、民主同盟は九名の代表をだして、戦後中国再建の問題について協議したのであった。しかし、この会議の半年後には国共両党の全面的な内戦がはじまり、国民党は内戦反対を主張した民主同盟にも解散を命じた。そこで、民主同盟の幹部は一部は中共の「解放区」に入り、一部は香港に逃れて民主同盟の活動を続け、中共の勝利が確実になった一九四八年いらい、その主脳者は中共と提携して新国家樹立の準備活動に従事したのであ

た。

九三学社は、抗日戦の終りごろの四四年十一月に、許德珩を中心とする科学界、教育界の人々によって結成された学術的性格の強い政治団体で民主科学社とよばれたが、四五年九月三日の国際的反ファシスト戦争勝利の日を記念して九三学社と名づけられた。

中国民主建国会と中国民主促進会は、いずれも抗日戦終了の直後に重慶で発足した。民主建国会は、民主的な工商業者と教育者によって四六年十二月に結成されたが、翌年には国民党によって地下においこまれた。民主促進会は、四五年末に馬叙倫、許広平、周建人などの民主的文化人によって組織された。

国民党革命委員会（四八年一月に香港で結成された歴史の浅い政党であるが、のちにこの党に合流した三民主義同志連合会（中心的指導者譚平山）は四五年十二月に重慶で発足し、同じく国民党民主促進会（蔡廷鍇が中心）は、四六年四月に広州で発足していた。これらはいずれも、国民党内の民主勢力の新しい動向を示したものであったが、四七年いらい国民党の広西派の長老である李済深とクリスチャン・ジェネラル馮玉祥を中心にして、さらに孫文の片腕といわれた廖仲愷の夫人可香凝らが参加して準備がすすめられ、そのご内戦における国民党の敗北につれて多くの参加者をえて、新中国になってからは民主政党のなかのもっとも有力な政党として発展した。

以上の諸政党が、新中国における政党としての地位を獲得したのは、いずれも、中共が四八年のメーデーに際してよびかけた新政治協商会議（正式成立にあたって中国人民政治協商会議と改称）準備会に参加して、中共に協力して中華人民共和国建国の政治活動に参加したことによってである。そして、それまでには、各政党はそれぞれの綱領あるいは規約をもっていたのであるが、この建国準備の過程で、中共が提案した中国人民政治協商会議の共同綱領に賛成

して、これを固く守ることを誓約した。つまり、それによって、各政党の綱領や政策のうち、この共同綱領と矛盾するものは放棄して、共同綱領をもって各政党の行動の規準とすることを決定したのであった。*

* 国民党革命委員会は、四九年十一月に国民党民主派の第二回代表大会をもって、ここで三民主義同志会や国民党民主促進会の解消とさらにその他の国民党勢力の参加による同党の拡大を決定したが、この大会の宣言は「人民政治協商會議の共同綱領はすなわちわれわれの行動の基本綱領である」とのべている。民主同盟は、四九年十二月に北京でひらいた第四回中央委員会と第五回中央委員会で、民主同盟の従来の綱領を廃止して、人民政協の共同綱領を民主同盟の綱領としてうけいれることを決議している。民主建国会も、四九年九月の會議で人民政協の共同綱領をもって民主建国会の在来の政綱にかえることを決議している。

中国人民政治協商會議共同綱領は、中華人民共和国憲法成立まで憲法に代るものとしての役割を果たしたものであって、全文七章六〇条にわたって新中国の基本政策を規定しているが、それを貫いている思想は、中共の毛沢東が一九四〇年いらい主張してきた新民主主義の理論であった。だから、その第一条は「中華人民共和国は新民主主義すなわち人民民主主義の国家であり、労働者階級が指導し、労働同盟を基礎とし、民主主義的諸階級と国内諸民族を結集した人民民主主義独裁を實行し、帝国主義、封建主義および官僚資本主義に反対し、中国の独立・民主・平和・統一・富強のために闘う」と規定している。ここで、中華人民共和国を労働者階級が指導するといふとき、マルクス主義の用語例からすると、労働者階級の政党である中国共産党が指導するといふことを意味している。共同綱領ではそういう直接の表現はされていないが、しかし、各党派が中共のよびかけに応えて新中国の建設に参加し、しかも中共によって多年唱えられてきた新民主主義の理論にもとづく共同綱領をうけいれたのであるから、それは同時に、各党派

が新中国における中共の指導的役割を承認したものと理解することができる。

(2) 中共との関係にみられる特質

以上の成立経過からわかるように、これらの政党に結集した諸勢力は、中国の独立と民主化をめざして困難な歩みをへてきた人々であり、その大部分は階級的には小ブルジョアジーと民族ブルジョアジーに属する人々であり、その知識人である。ただ国民党革命委員会のばあいには、構成要素はもっと複雑であり、多年にわたって地主勢力の代弁者であった国民党の将領もふくまれている。ただ、これらの民主政党のなかには、労働者、農民の出身者で労働者農民とともに闘ってきたという勢力はほとんど発見されないものであって、したがって現代の中国では、労働者農民の闘いは、もっぱら中共によって代表されてきたといえることができる。そして、これらの政党は、国民党時代にはいずれもはげしい弾圧をうけて、政党としての成長、発展を阻止されてきたが、中共が指導した新中国の建設に参加し、その民主統一戦線の単位になることによって、新たな発展の機会にめぐまれたのである。

しかし、こうして民主政党が公然と登場した新中国は、すでに資本主義への道を歩む中国ではなかった。したがって、これらの政党も、資本主義政党のような相互の対立・競争をつうじて発展することはできず、はじめから共同の綱領と共同の政策に即して新中国の発展に寄与し、そのなかで各政党の発展をはからなければならなかった。そのためには、各政党が、それ以前に考えていた綱領・政策のある部分は切りすて、ある部分は訂正しつつ、共同綱領に服さなければならなかったし、また、そのために中共の全般的または個別的な指導をうけいなければならない。つまり、各政党は、中共の指導する民主統一戦線の一部としてのみ発展する道をもっていたのである。*

* 新国家の成立と同時に定められた人民政治協商會議組織法では、その第四条で各民主党派が「声明して中国人民政治協商會議を退出する自由をもつ」ことをきめているし、五四年十二月に定められた中国人民政治協商會議規約も第四条で同様の主旨をきめている。しかし、人民政協を退出することが、實際問題としてその政党の活動にとって致命的な打撃となることは明らかである。

中国の民主政党のこのような性格が、資本主義諸国の政党にみられない新しい性格のものであることは明白である。第一に、これらの政党は、いずれも中共と対抗して中共をけおとすことができないばかりでなく、民主政党相互のあいだでも他をけおとすことによって自らを強化することはできない。なぜならば、そのようなゆき方は、人民の民主的な団結によって社会主義への道を歩むという新中国の人民の要請と合致しないからである。

これを他の半面からみるならば、これらの政党が、それぞれ小ブルジョアジーや民族ブルジョアジーを代表するとしても、その政党の基本的な性格は、けっして一面的にその属する社会層の利益を主張することではありえない。なぜならば、社会主義への道において、小ブルジョアジーやブルジョアジーが、自らの政党を先頭にたてて自らの狭い利益を主張するとすれば、それは各階層の矛盾を激化するだけであって、中国を社会主義に前進させることにはならず、そのことによって、結局は小ブルジョアジーや民族ブルジョアジーの将来の利益をも害することになるからである。もちろん、各政党は一定の社会的基盤をもっているから、それぞれが属している社会層の要求を代表しなければならない。たとえば、国民党革命委員会も、もと国民党に属していた人々のあいだに党勢を拡げると同時に、その人々の利益のために努力しなければならない。旧国民党员で適当な部署についでいない人々を適当な部署につかせるように努力しなければならないし、かれらの要求を中共や各級の人民代表大会に伝えなければならない。しかし、資本主

義を捨てて社会主義に移行しつつある中国においては、各階層の人々がより積極的に活動するためには、かれらが新しい考え方と新しい仕事のしぶりを身につけなければならない。つまり思想の改造と進歩が要求される。もしそうした改造と進歩をぬきにして、ただ旧国民党員を重要ポストにつけるように国民党革命委員会が要求するとすれば、それは社会の要求に背くことになり、そうしたやり方は中共との矛盾を激化させるだけになるからである。そうであるから、たとえば、国民党革命委員会が四九年十一月十二日にだした宣言は、同党が元国民党のなかの良心的な分子を結集することを強調すると同時に、党員にむかつて「中山（孫文）先生の進歩的創造的精神を学習し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を学習」することを訴えている。

これでわかるように、社会主義社会における政党としての民主的政党は、各階層の人々と「連繫」し、かれらを「代表」するだけでなく、それらの人々を「改造」するという任務を果せられている。そうすることによって、単なる利益代表として一定の層の利益を主張するだけでなく、その層の利益と社会全体の利益とを調整していくことができる。

このことは、民族ブルジョアジーを代表している民主建国会を例にとれば、いっそう明瞭になる。民主建国会は、民族ブルジョアジーに社会的基盤をおく政党ではあるが、いわゆるブルジョア政党ではない。なぜならば、民主建国会は、けっして民族ブルジョアジーの利益を一面的に主張する政党ではなく、民族ブルジョアジーと連繫し、それを代表しながら、これを改造するという任務をもつ政党だからである。ここに、中共の指導する民主統一戦線の構成要素である民主政党的特殊な性格がある。そして、各民主政党がこのような性格をもつからこそ、民主政党的発展が民主統一戦線の分裂や矛盾の拡大を意味することなく、民主統一戦線の拡大強化となることができるのである。しかし、そ

のためには、この民主統一戦線とその構成要素にたいする中共の不断の指導が必要とされることは自然である。

それでは、中共はこれらの民主政党にたいしてどのような指導と援助をあたえてきたか。この点で、まず注目されることは、中共が各民主党派の多年にわたる要求である中国の独立・民主・平和・統一・富強という要求を発展させながら、そのためには中国が一步一步と社会主義への道を歩まなければならないことを明らかにしたことである。この中共の政策は、第一には前述の共同綱領となって示され、それはそのこの数カ年のあいだにきわめて忠実に実行に移された。この共同綱領は周知のように、中国が社会主義に向って前進することを明記しないで、中国の人民が、帝国主義、封建主義、官僚資本主義と闘いつつ、独立・民主・平和・統一・富強の新中国をつくらなければならないことを強調している。しかし、そのために具体的にとるべき政策として、農村における土地改革をはじめとして、国営企業に重点をおく工業化政策、土地改革ごの農業における協同化の道が示されている。それは他でもなく新民主主義の道であり、社会主義への道であった。こうして、中共は、この共同綱領とそれにもとづく具体的な政策の実践を行うじて、各民主党派と全国人民に社会主義への道を示してきたのであった。

第二に、中共は、各民主党派が中央政府や人民代表機関において適当な地位をしめうるように系統的に配置してきた。後述するように、主要な各政党の指導者は、いずれもはじめは中央人民政府委員に、そして憲法公布ごには全国人民代表大会常任委員会副委員長の地位に選ばれたし、また各党から國務院の部長がでているし、人民代表大会代表もでている。そして、これらの人民代表大会代表の数は、各党派がじっさいにもっている実力以上に選ばれてもいる。これは、各民主党派を援助していこうとする中共の政策の現われである。

第三に、中共は各民主的政党が自力で発展するのを助けるだけでなく、中共自体の組織的な力や宣伝の力によって各

民主政党的發展を助けている。その点で、もっとも顯著なのは、国民党革命委員會のばあい、国民党内の各派はもとと横のつながりのうすい派閥的性格をもつものであったのに、そのほとんどが国民党革命委員會に結集したのには中共の指導力が大きく作用している。また中共は、各政党的發展を助けるために、若干の中共黨員を各政党に加入させて、その政党的内部團結や政策決定の仕事を手助けしてきた。たとえば、民主建國會の常任委員の一人である許条新は中共中央委員會統一戰線部の幹部であり經濟學者でもあるが、かれは民主建國會の一員として民族ブルジョア階級にたいする指導を手助けてきた。その他の各政党にも、数はごくすくないが中共黨員が参加していた。（しかし、中共は、五六年くらい、民主党派のなかの中共黨員をひきあげる方針をとっている。）

第四に、中共は主として人民政治協商會議をつうじて各政党相互の話しあいの場をつくり、各政党的協力を推進している。その一つとして重要なことは、各政党がそれぞれの發展の対象をきめたことで、たとえば、国民党革命委員會は、旧国民党のなかの良心的な分子や政府機關のなかの勤務員で學習の成績のよい人というようにきめられ、民主建國會は工商業資本家および代理人、民主同盟は主として知識人、民主促進会は中小學教師、農工民主黨は、經濟建設の専門家、技術者、九三學社も文教科科學工作者、致公黨は華僑とその家族というように、その働きかける対象がきめられている。（各党的働きかける対象の決定は、いずれも四九年から五〇年にかけて明らかにされている。）

こうして、各党派の關係は、当然のこととして若干の競合面や矛盾の面を残しながらも、基本的には協力と相互援助の關係として發展しつつあるのである。

(3) 各民主政党的の現勢

前述のような性格をもつ民主政党史、新中国の成立らしい、どのような発展をとげたか。また、各党は、現在、全国人民代表大会と国务院のなかで、どの程度の地歩をしめているか。

まず一般的にいえることは、各政党は、党員数においても幹部数の充実に際しても、いずれも成立当初と比較にならない発展を示している。例を国民党革命委員会にとると、五五年の末には五〇年に比して党員が五倍半にふえたことが報告されていたが、五七年三月の中央委員会総会（第三期中央委員会第二回総会）における李濟深主席の報告によると五七年二月までに党員は五五年末実数の八〇%以上ふえ、二四の省市と五七の市、県に組織をうちたてたといわれている。同じ報告は、同党が二四の省市で二万二四六三人の人と連繫したと報告しているが、この「連繫」ということと党員であることの区別が明らかでない。また五月になると同党常任委員の王昆仑は「現在連繫している社会人士は二万五〇〇〇人に達している」ともいっている（王昆仑の五月二十三日の発言——人民日报五・二四より）。これらの数字の意味を正確につかむことはできないが、おおまかにいって五〇年当時の同党の党員数が約二〇〇〇人位のものであり、そのごにおいて、またとくに五六年度において急速にのびていることがわかる。

民主同盟の発展も急速であり、五六年には、五四年五五年二カ年の発展総数の二倍にあたる発展をとげたといわれている。そして、五七年上半年期におけるその党員数は約三万とみることができる（五七年七月の全国人民代表大会における羅隆基の自己批判書より）。そのほか、民主促進会の会員は、五六年八月には五〇年に比べて一八倍に増加したと報告され（五六年八月、第二回全国大会における周建人副主席の報告）、九三学社は五六年の一年で社員が五倍になったと報告されている（同党委員袁翰青の五七年五月十三日の発言、新華半月刊五七年一一号）。さらに、民主建国会は五七年上半年期に約七〇〇〇人であった会員が五六年十月には一万九〇〇〇以上に達したと報告されている。（新華半月刊五六年二四

号)

諸政党のこのような急速な発展は、半面において、これらの政党がその成立当初にいかにか小さなグループ的な政党であつたかを示しているが、それにしても、このように新中国になつてから、各民主政党が一律に黨員を増加させえたことは、これらの政党にとって新しい環境が基本的にはいかに有利なものであつたかを示している。

もちろん、民主政党の発展を一般黨員の数の発展だけでおしはかるのは正しくない。質的な面でも、各政党の発展には注目されるものがある。たとえば、民主同盟の上海市委員會は、五六年の上半期に新同盟員四三二名を吸収したが、そのうち大学の校長、学部長、教授、助教授、講師を担当しているものが一二六人にも達していると報告されている。このことは、民主同盟の社会的影響力が確實に増大していることを示している。

国民党革命委員會の充実も同様に注目される。現在同党の中央委員會副主席としては、何香凝、程潜、蔡廷鍇、張治中、熊克武、竜雲、鄧宝珊、陳紹寬の八氏があるが、いずれも国民党員として古い経歴をもつ人々である。このうち何香凝は孫文の片腕といわれた廖仲愷夫人（廖承志の母）であり、孫文夫人宋慶齡とともに一貫して民主主義の立場を守ってきた人であるし、程潜は孫文時代に孫文の大本營の軍政部長をつとめ、そのごは湖南省主席などをへてきた人であるし、蔡廷鍇は有名な十九路軍の軍長として抗日戦に活躍した人である。さらに張治中は、現在台湾にいる陳誠と並んで蒋介石直系の将領として注目された人であるし、陳紹寬は国民党海軍の育ての親といわれた人である。そのほか、竜雲は雲南省の軍閥、鄧宝珊は馮玉祥系の元西北軍の幹部であり、熊克武も孫文時代から活躍した国民党の先輩である。そのほか、常任委員のうちには、蒋介石時代に上海市長や陝西省政府主席をつとめた邵力子、抗日戦時期の第一戦区司令長官であつた衛立煌、蒋介石のもとに行政院秘書長をやつた翁文灝、広西省の主席であつた黄紹竑

など、旧国民党時代の幹部は、すくなくとも現在台湾に残っている程度の人々が、この国民党革命委員会を中心として、新中国の建設に参加している。

そのほか、民主建国会も最近数年間に著しく幹部陣を充実して、その副主任委員や常任委員には、多年実業界の第一線にあつた有力な人々をふくんでいる。*

* 各政党の幹部と民主同盟の幹部は若干重複している。中国民主促進会主席馬叙倫と農工民主党主席章伯鈞はいずれも中国民主同盟の副主席になっているし、民主建国会主任委員黄炎培、民主促進会副主席の許広平が民主同盟の常任委員でもある。これはおそらく、民主同盟がはじめは民主党派の連合体として発足してのちに独立の政党となつた経過を反映しているのであつて、民主促進会や農工民主党が民主同盟に団体加入しているのではない。

現在の各民主政党幹部が政府と人民代表機関にしめる地位の主要なものは、つぎのごとくである。

国民党革命委員会——中央委員会主席の李済深は、全国人民代表大会の常任委員会副委員長、同じく副主席の程潜、張治中、竜雲は国防委員会副主席であり、また、同党常任委員のうち朱学範、蔣光鼎が國務院部長として活動している（水利部長傅作義も旧国民党の將軍であるし、衛生部長李德全も一時国民党革命委員会に属したが現在の国民党革命委員会では中央委員のリストにのっていない）。同党所属の全国人民代表は五九名、人民政協の全国委員は二五名。*

中国民主同盟——主席沈鈞儒は全国人民代表大会常任委員会副委員長、副主席羅隆基は國務院森林部長、同副主席史良は司法部長。同盟に属する全国人民代表八二名、人民政協全国委員は二五名。

中国民主建国会——主任委員黄炎培は全国人民代表大会常任委員会副委員長、副主任委員章乃器は國務院食糧部長、同李燭塵は食品工業部長。同会に属する全国人民代表六三名、人民政協全国委員二五名。

中国民主促進会——主席馬叙倫並に副主席周建人、許広平は全国人民代表大会常任委員会委員、周建人は同時に國務院高等教育部副部長。同会所属の全国人民代表は一六名、人民政協全国委員は一二名。

中国農工民主党——主席章伯鈞は國務院交通部長並に人民政協全国委員会副主席。同党所属の全国人民代表は一九名、人民政協全国委員一二名。

中国致公党——主席陳其尤は全国人民代表大会常任委員会委員。同党所属の全国人民代表四名、人民政協全国委員六名。

九三学社——主席許德珩は全国人民代表大会常任委員会委員兼國務院水産部長、副主席梁希は國務院林業部長。同党所属の全国人民代表二四名、人民政協全国委員は一二名。

* ここに記した各党所属の全国人民代表大会代表の数と人民政協全国委員の数は外文出版社発行の英文の人民中国のハンドブックによった。

二 長期共存方針の提唱

(1) 過渡期の方針と民主党派

各民主政党は、前述のように新中国とともに新しい希望にみちた政治生活にはいたのであるが、これらの政党